

210
力

名世説

大田南畝編
大師名波
上卷
上下

長谷寺... 宿善有無... 今生始... 二種三根... 初心也...

○宝命撰義鈔下本... 初心。我心者數... 勝進分ノ仙也...

○先指葉經三卷... 比叡山神... 神道ヲ遂ニ立...

○神道ヲ遂ニ立... 伊弉册... 而其道之西女...

○閻摩... 田立之教也... 庚申ノ日...

○阿部善藏... 〇鹿大麩... 〇名物之ル...

〇〇カビ木... 〇トウ玉松... 〇コウクシ...

〇〇リシ山... 〇〇リシ山... 〇〇カビ木...

〇〇カビ木... 〇〇カビ木... 〇〇カビ木...

〇〇カビ木... 〇〇カビ木... 〇〇カビ木...

〇〇カビ木... 〇〇カビ木... 〇〇カビ木...

〇〇カビ木... 〇〇カビ木... 〇〇カビ木...

〇〇カビ木... 〇〇カビ木... 〇〇カビ木...

〇〇カビ木... 〇〇カビ木... 〇〇カビ木...

〇〇カビ木... 〇〇カビ木... 〇〇カビ木...

〇〇カビ木... 〇〇カビ木... 〇〇カビ木...

〇〇カビ木... 〇〇カビ木... 〇〇カビ木...

〇〇カビ木... 〇〇カビ木... 〇〇カビ木...

〇〇カビ木... 〇〇カビ木... 〇〇カビ木...



假名世説序

書之有説也尚矣義慶氏取剔

於説林説苑而垂説之書作焉

自是而降取則於斯者不為不

多矣在彼何氏語林在我大東

世語可謂其續耳慶元以來縉

事... 〇〇カビ木... 〇〇カビ木...

〇〇カビ木... 〇〇カビ木...

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高士 誠儻 詭異 之行 實繁 有徒 則之 不可 無說 也 蜀山 翁有

見于此 嘗作假 名世 說翁老 罷

疎懶 未能 脫稿 項者 書賞 請

之木 縱吏 不已 其門人 父寶 與

校焉 曰世 說猶 有補 况此 未定

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

高嶋一ノ数

伊達

序ノ三

速筆集下

危不陸心

露霜ノ草葉ヲ

生ニ習ヒテハ常

盤ノ松ヤ紀也

同佳集下

善惡不二

清々水高行

無リケリ瀟々

サヌ月夕入

同集下 類翰師

佛曾參思シテ

捨果テ捨心

有ルヲ忘テ

冊子 豈得 不補 乎 来即 我謀 予

與翁 交情 特厚 豈可 以蕪 陋而

辭乎 曰抄 所臆 記者 若干 條 與

之且 語之 曰古 不謂 乎 紹不 足

狗尾 續後 之覽 者以 之議 之 我

將以 此對 遂以 此言 為序

有テ飽テ 秘密 最上 法義ヲ 聽聞シ 且彼 尊ノ 御宗門ニ入リ 見テ朝テ

テ言ノ 吾郷里ノ山ニ生ル筆竹ヲ持テリ此ヲ予汝ニ謝セシ若シ疾病アル者

ノ體ニ此筆竹ヲ以テ大ノ字ヲ書シ且光明真言七遍ヲ唱テハ病去ル差

上下偈ヲ筆草ニ本ヲ我ニ與フ由テ世國郡ヲ問ヘ應ズニテ忽ニ去ル其

後之ヲ試ニ果シテ修テ了觀テ大師ノ化身ナリト余之ヲ察ス是

イハレ彼ノ筆草ナクハシ此老波今現ニ福山ニ住居シ支利益ヲ得ル者

許多之是ニ由テ諸人異名ニテ大師老波ト云ヘリ斯ニテ御慈悲深ク大師御

○修驗速登集
北七丁
以心傳心
紅花末セ又常
般ノ山ニ任ム鹿
己シ鳴キテ秋
ヲ知ラシム
又同集ニ
仁平等説如
一味雨
諸トモニ味雨
八酒分庄松縁
リニ分岐此等キ
全連海集末七丁
既即其コトヲ
開リ第小川水
移リテモ光リハ
同ノ山ノ端ノ月

又北四丁
急鎮和南
若得始覺還
覺リ得テ還
テ見レ古迷ヒ
ト留心サリテ
又北七丁
應無所住而産
其心
水身ノ行ニ歸世
跡他ニテ去トモ
道ハ七心ニサリテ
又北六丁
不變眞如眞
法性情
階級眞如妄
念何由起
白雲ノ色
ハ夫トナガラ紅雲
正徹書記

文政七年歲在甲申閏八月上
浣北峰山崎美成識
○剛日課眞言ヲモ唱ヘタ後テ寶號ヲ七通ツ息ヲ又様ニシテ世ニアル間ハ無
事息災峽世終ス其終ニ
費ラ花咲ク極樂ノ玉ノ

紫州國志崎ノ西ノ地方境內ノ
産物ニモ草竹ヲ豊サセテ
ノ錫ノ産地如夫ノ所歌テ
音ノ明ノ錫ノ坂ニモカレ身ヲ行ク方ハコノ果ツ事

東陽關思亮書

己ノ書

醉生行

平の五七

十五五

諸多海

市補近

聖給比

日魚



文宝堂謹寫

字 蜀山

目錄

續漢書上ノ化正ノ石
京都五卷九十九卷風之箱下廿七石
弘治元年也

德行 十一條
言語 二十九條
文學 十七條

方正 四條
雅量 十三條
識鑒 一條

賞譽 五條
品藻 五條
捷悟 三條

夙惠 二條
豪爽 九條
譏險 一條

企羨 一條
傷逝 二條
擿逸 一條

賢媛 二條
巧藝 十三條
任誕 五條

簡傲 三條
排調 十一條
輕詆 三條

假譎 一條
汰侈 二條
忿狷 二條

尤悔 一條
紕漏 一條
懲濼 一條

假名世説上

理齋隨筆三卷北下左蜀山ノ辞世アリ傳見

杏花園蜀山編
文宝堂散木補

○松永貞徳号其以九又云相國寺の仁如和尚可法つ才

俗男の儒学と云一討化と自得と一のあり入道

道号と和名と多しむかおん中と云り一

其方のうらやまのまのまの東坡山谷が片

字と云り城谷茶庵と云り人々を茶号する

と云り茶号する者あり茶号のウケ斎の字あり

ゆゑに由己け

○西行法師東山
雙林寺高僧
庵ヲ結テ空ノ
前ニ櫻一本ヲ植テ
建久九年二月
十六日七十三才ニ
歿ス

○西行四國修行
首途ス上テ加茂
ノ社多リ
畏心四手ニ目
カレ或又イヨモ
ト思フアリニ

○西行法師東山
雙林寺高僧
庵ヲ結テ空ノ
前ニ櫻一本ヲ植テ
建久九年二月
十六日七十三才ニ
歿ス

○西行法師東山
雙林寺高僧
庵ヲ結テ空ノ
前ニ櫻一本ヲ植テ
建久九年二月
十六日七十三才ニ
歿ス

○西行法師東山
雙林寺高僧
庵ヲ結テ空ノ
前ニ櫻一本ヲ植テ
建久九年二月
十六日七十三才ニ
歿ス

○西行法師東山
雙林寺高僧
庵ヲ結テ空ノ
前ニ櫻一本ヲ植テ
建久九年二月
十六日七十三才ニ
歿ス

○西行法師東山
雙林寺高僧
庵ヲ結テ空ノ
前ニ櫻一本ヲ植テ
建久九年二月
十六日七十三才ニ
歿ス

○西行法師東山
雙林寺高僧
庵ヲ結テ空ノ
前ニ櫻一本ヲ植テ
建久九年二月
十六日七十三才ニ
歿ス

俳調

○祇園名正所より伯玉二首と詠の人の下り

朱三起儀浪 朱四吹松風 月達たけな追利おとし否や

丸アヅ鯉ニ出雲時

又祇園豆腐の詩に葛溜琥珀薄豆腐玳瑁斑あはれ
め新あたらしうづき 惜おぼしき金首かねくぶとていふ

○秩父辺の曲名まづあはれおとする午あふらんふらり
浪施なみり玉たまとて己おのが袖そでとていふ
しうていふをききていふ
しうていふをききていふ

巧藝

○京氏某の長門の門人まゝに宝永の比ひに二弦にげんとていふ
はくしあし日某ひのいひる様さまにらるる時三弦さんげんの音ねししをいふ

いふとて海嘯うみげうりあはれとていふ
と誘こほりて急いそきゆりていふ
いふとていふをいふ
いふとていふをいふ
いふとていふをいふ
いふとていふをいふ

言語

○近松門を境なつきらの文ぶん

代々甲曹の家かたがたにはいふとていふ
つていふとていふとていふ
とていふとていふとていふ
とていふとていふとていふ
とていふとていふとていふ
とていふとていふとていふ

一、*Handwritten text*

倒懸の *Handwritten text*

に *Handwritten text*

Handwritten text

の *Handwritten text*

貞保九年申九上旬

一寂名阿海院續矣日一具足居士

不俟終焉期終自記春秋七十二歳 □

の *Handwritten text*

此 *Handwritten text*

一 *Handwritten text*

一 *Handwritten text*
 二 *Handwritten text*
 三 *Handwritten text*
 四 *Handwritten text*
 五 *Handwritten text*
 六 *Handwritten text*
 七 *Handwritten text*
 八 *Handwritten text*
 九 *Handwritten text*
 十 *Handwritten text*
 十一 *Handwritten text*
 十二 *Handwritten text*
 十三 *Handwritten text*
 十四 *Handwritten text*
 十五 *Handwritten text*
 十六 *Handwritten text*
 十七 *Handwritten text*
 十八 *Handwritten text*
 十九 *Handwritten text*
 二十 *Handwritten text*

補

近松の付名穉矣且具是居士と云ふありしゆり此れはあや
ふくははた取谷所は西寺中よりあやの墓あり
おのこは墓碑の石控はくもと云ふはしりも且と
日一の二文字ありしゆり近松は名宗ありしゆり
あはしり且探年体記に土月廿二日とありしゆり
墓碑の裏にけり終り孫示すに
年十月廿日 此あり

排調

○久米團二郎の詩

舟上筏降大堰河と云ふ句あり或人云々

名聖人軟石垣町と新と云ふ

○山岡明河孫名は後明河の子亮隠居しり明河孫は佛と

云ふ相名と云ふ孫と云ふ事永九年庚子系部

文學

おのこは病をけり十月十五日とありしゆり二井寺山岡
氏の祖道阿弥の墓ありしゆり阿弥の墓あり例
尋しりし明河孫と云ふ事永九年庚子系部
著述のまゝに後集の名不しりしゆり主出はの
しりしゆり治の墓ありしゆりおのこはの
利登の所ありしゆり
しりしゆり坊主ありしゆりおのこはの
辭世

百と云ふありしゆりおのこはの夢と云ふ

自墮落先生山後明河の子亮又名と云ふ思庵と号しりしゆり

捨樂坊と云ふ坊と確連坊と云ふ坊主の元文四年己未歲

排調
補

十二月晦日年四十五... 柩を...

柩をのり田舎の坊より送る... 谷中野

中野村補陀... 柩を...

柩を... 柩を...

柩を... 柩を...

柩を... 柩を...

柩を... 柩を...

柩を... 柩を...

柩を... 柩を...

柩を... 柩を...

柩を... 柩を...

柩を... 柩を...

巧藝補

賞答

らよの高字谷の語... 上手の... 舞の心... くれ舞句

これ... 舞の心... くれ舞句

○大屋裏住... 白子... 柵... 目...

柵... 目... 舞...

舞... 目... 舞...

舞... 目... 舞...

舞... 目... 舞...

舞... 目... 舞...

舞... 目... 舞...

清くせうしんぐの世を程分所の早ねらのあつとて
しんぐー因ド所を益の美人とてはねを伴ふあり
こぬが軒ぬれ釘をあふおとてまてつげをてり市中の
かの持子あつば所おぬの費用はまてつげの家をてりて
すてつはまのあつて美人一人お費用をまてつげと評語
からくちりし時裏仮大佐のまてつげをてりてあつとて思
しは重佐袖かきあつてまてつげと各の評語をまてつげ
らするあつ例をまてつげとまてつげあつとてつげとつげと
まてつげあつとてまてつげあつとてつげとつげあつと
市中の者もまてつげと市中おまてつげの費用をまてつげ
とつげと

德行
一補

清くせうしんぐの世を程分所の早ねらのあつとて
しんぐー因ド所を益の美人とてはねを伴ふあり
こぬが軒ぬれ釘をあふおとてまてつげをてり市中の
かの持子あつば所おぬの費用はまてつげの家をてりて
すてつはまのあつて美人一人お費用をまてつげと評語
からくちりし時裏仮大佐のまてつげをてりてあつとて思
しは重佐袖かきあつてまてつげと各の評語をまてつげ
らするあつ例をまてつげとまてつげあつとてつげとつげと
まてつげあつとてまてつげあつとてつげとつげあつと
市中の者もまてつげと市中おまてつげの費用をまてつげ
とつげと

炭とわがさの跡もあつていふはむをばうくらへ汗とわが

あつていふはむをばうくらへ汗とわが

あつていふはむをばうくらへ汗とわが

あつていふはむをばうくらへ汗とわが

あつていふはむをばうくらへ汗とわが

あつていふはむをばうくらへ汗とわが

あつていふはむをばうくらへ汗とわが

あつていふはむをばうくらへ汗とわが

あつていふはむをばうくらへ汗とわが

あつていふはむをばうくらへ汗とわが

言語

○西杉云何堪ぐらひのまきつと下は日代とそりていふ

方正補

明右の甲青もねりて左生つ老年のほい誕生りて法はす一

族と令集し一席上とて謂くいづく平家幸はまゝし

いづくも水早の時らゝはあつていづく上人の不討の突厄も

あつていづく平家死つては露之まゝはすりてあつていづくも

あつていづく先一あまみ字と書つていづくもあつていづくも

あつていづくもあつていづくもあつていづくもあつていづくも

あつていづくもあつていづくもあつていづくもあつていづくも

あつていづくもあつていづくもあつていづくもあつていづくも

あつていづくもあつていづくもあつていづくもあつていづくも

あつていづくもあつていづくもあつていづくもあつていづくも

あつていづくもあつていづくもあつていづくもあつていづくも

輕談
補

その準に似たるものとして書きとれり引かておれり
うまきものとして田地をとりおびつておびつたふれ
と知り大和とすれりしものなりしものなりしものなりし
ゆるり筆記をりてりしものなりしものなりしものなりし

おのりしものなりしものなりしものなりしものなりしものなりしもの
牌をへはりしものなりしものなりしものなりしものなりしものなりし
干狐とてりしものなりしものなりしものなりしものなりしものなりし
干狐とてりしものなりしものなりしものなりしものなりしものなりし
川折突のたむ。

手紙を埋まると鯉とのせりしものなりしものなりしものなりしもの
鯉の字を埋まると鯉とのせりしものなりしものなりしものなりしもの

賢媛
補

出羽の國越前守鈴木某の妻としてのかぎの凶化を
もつたものは名を折井とてりしものなりしものなりしものなりしもの
折井とてりしものなりしものなりしものなりしものなりしものなりし
まがどつりしものなりしものなりしものなりしものなりしものなりし
一日何いおくの鯉の字を埋まると鯉とのせりしものなりしものなりしもの
このりしものなりしものなりしものなりしものなりしものなりしもの
鯉の字を埋まると鯉とのせりしものなりしものなりしものなりしもの

賞
補

言
詰


○延宝二年乃久下人表傳がきりしものなりしものなりしものなりしもの

山村がきりしものなりしものなりしものなりしものなりしものなりしもの


ふつりしものなりしものなりしものなりしものなりしものなりしもの
二代目

任
補

雅
量

ふもあづび是とてなを延来の神代とてつらふら
ふ所竹らきつちる時銀色は枯すあつて心とくまら
でしほつとすもを源漢とてあつてつらふまは
けはつてつらふは源漢又治るあつてつらふとあつて
つらふつらふもを源漢とてつらふつらふつらふ
つらふつらふ
廣沢先生 姓は細井名は忠也
公謹改所たまはるは のちあつて服若の小刀七月日
ま八月のおまよく研  つらふつらふつらふつらふつらふ
つらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
つらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
高野先生 姓は銀部名は元喬字は小豆飯のあつてつらふつらふ につらふつらふ

言
語

あづびとつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
今年生る鬼の首と挑灯の鏡をけらつてと組末先生
たつて今年がおまよく研  つらふつらふつらふつらふつらふ
人小豆飯と名へ鬼の首と挑灯と名へ挑灯と名へ挑灯
ゆ中と名へ挑灯と名へ挑灯と名へ挑灯と名へ挑灯
かつつらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふ

○二河万歳の唱歌は除勅十年辰のつらふつらふ
はつたつてつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
銘弥勅元年卯二月二十二日とあつて元年卯とて十年
つらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふ

言語補

弘勅二年逆修秀永阿闍梨とあり海東諸國記より
之一年号とあり然るに元年号とあり

永正中人皇百五十五代後桓天皇の号あり

永正二年の号あり凡て二年を経て
田村の氏孫寺通範が諸事公事抄卷二の御旨に於田野
不動院玉幡之供養と題して弘文のまに弘勅二年二月
六日とあり之を以て永正二年十一月日預又同五年二月日
弘文の記述又同四年十月の弘文と載して之を以て
中之此号ありとあり永正の元年と号あり
考るに本土寺過去帳に日富弘勅元丙寅十一月十一日あり
丙寅の永正二年ありとあり
四年丁卯とて弘勅の号あり

言語補

德行三補

弘勅二年の号あり凡て二年を経て
田村の氏孫寺通範が諸事公事抄卷二の御旨に於田野
不動院玉幡之供養と題して弘文のまに弘勅二年二月
六日とあり之を以て永正二年十一月日預又同五年二月日
弘文の記述又同四年十月の弘文と載して之を以て
中之此号ありとあり永正の元年と号あり
考るに本土寺過去帳に日富弘勅元丙寅十一月十一日あり
丙寅の永正二年ありとあり
四年丁卯とて弘勅の号あり

但来先生不姓物部氏に授けし名に傳ねの正五九月寺より祈禱日

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines. Some characters are written in a more standard style, possibly indicating specific words or punctuation.

言語
補語

Handwritten text in a cursive script, similar to the top page. It consists of about 10 lines of text. There are some red markings or corrections visible within the text.

言語

萩生惣三郎が和譯の中より通じてありしにむらり
ししむらりしむらりしむらり田舎者くむらりしむ
むらりむらりむらりしむらりしむらりむらり

本阿弥光悦が行状記とてまこと人のつくりとて
光悦の藝一として其の年をいふにむらりしむらり
むらりしむらりしむらりしむらりしむらりしむらり
小致としてむらりしむらりしむらりしむらりしむらり
とむらりしむらりしむらりしむらりしむらりしむらり
武ありしむらりしむらりしむらりしむらりしむらり
むらりしむらりしむらりしむらりしむらりしむらり
むらりしむらりしむらりしむらりしむらりしむらり
むらりしむらりしむらりしむらりしむらりしむらり

上り下りしむらりしむらりしむらりしむらりしむらり

京城ありしむらりしむらりしむらりしむらりしむらり
地としてむらりしむらりしむらりしむらりしむらり
のむらりしむらりしむらりしむらりしむらりしむらり
くむらりしむらりしむらりしむらりしむらりしむらり

京都千本通下土堂に燈を賣る者ありしむらりしむらりしむらり
八年丙辰百十の年むらりしむらりしむらりしむらりしむらり
毎日自ら燈を抄出づ諸方へ南に歩けり又是とてや
ありし故一桑園白公より鉄石軒より一歩とてむらりしむらり
まゝありしむらりしむらりしむらりしむらりしむらりしむらり
翁むらりしむらりしむらりしむらりしむらりしむらり
九千七百の年むらりしむらりしむらりしむらりしむらり

德行補

来ともしく... 徳来先生の刑律と... 是生よりま... 是下も... せし...

捷悟

○天明の比に... 語路... 語路... 語路...

九月... 命...

市川...

市川國太郎... 徳来先生の...

方正補

家道... けいけい... けいけい... けいけい... 東涯...

雅量補

童... 醉... 心... 心... 心... 心...

德行 補

石田梅岩 島平に移るに付 四千二二二年の附きと引くはまよ
法家の講釈とす四十年早口の附き即車石町通一寺地より
不左側子位ありしうらうら講席をひきよき表の附きまよに世
おくり其まよ

何月の日官講席録入るしと縁とす

あまのまよにけははま通しとすまよ

いづれとす講釈のまよにけまよとす破れの中

男女回と魚とてまよにけまよとすまよ

言語

○平秩東作云自撰まよにけまよとすまよ
まよにけまよのまよにけまよとすまよ
まよにけまよのまよにけまよとすまよ

德行

○ころのまよ古まよの論抄まよのまよ

丁時天正卯五月十日成就主筆成田内膳正後見
方念佛許廻向憑入るまよ

言語

○風まよ芝居のまよとけまよの中まよにけまよ
膝子の膝まよ下まよにけまよのまよにけまよ
まよにけまよのまよにけまよのまよにけまよ
雷まよのまよにけまよのまよにけまよ
まよにけまよのまよにけまよのまよにけまよ

文学 補

平秩章 姓平名いゆま 字いゆま 字いゆま 云菊子和訓まよにけまよ

和訓の論まよにけまよのまよにけまよのまよにけまよ

まよにけまよのまよにけまよのまよにけまよ

夙惠
補

言語

雅量

白石先生 名ハ環字ハ君美又右中
白石ト号シ一號解由ト稱ス 七歳の時芝居見たりて其の
 終まで一くまに記憶し居りし事ありしに此見ありて其の
 ありありとてあざむきと云はれり

○國倫云風風狂狂雀新唯ネリネリ旅の心ありてあはれむべまぢぢ 賤子
 女ヲドリ野を散せし男ヲカシユ侶の心ありてあはれむべ

○昔字の白とて昔心和尚の御事書にのりて人ごころに百人
 所の更り地よりして三十九年の如き書とて又萬翠一室
 とて扇額とて居りし事ありし事あり

今白書ありて其の連官性事ありて山ありてありてあり
 大勢押せし方口の如の性事ありてありてあり

四編子

古道青山静室居白りて堂つ信客路菊室窓空天
 寛茶水清き飲菊英芳可餐陶室秋色少此就

遠公着の修り

識鑿
補

交唐禪師の源子和が父の方ありてありて諸國の持の御出ね
 不ふりて同系の事ありてありてありてありてありてありてあり
 庭家の子格の事ありてありてありてありてありてありてありてあり
 此本とてありてありてありてありてありてありてありてありてあり
 本二冊ありてありてありてありてありてありてありてありてありてあり
 ろてありてありてありてありてありてありてありてありてありてあり
 吟ウツクシありてありてありてありてありてありてありてありてありてあり
 大なる歌ありてありてありてありてありてありてありてありてありてあり

唐韻科
○書言字法七卷五
下 獅圖立首
陸一甲書

輕詠
補

文學
補

古今の事は... 昔の... 諸江仁彦... 性理家の儒生... 仁志... 大辨... 論... 稲荷山... 題...

神國... 神道... 心身心...

德行
六補

二卷三十五丁... 結夏僧家... 又相結制... 九月十日... 五龍組又出伊...

世の中... 神... 修行... 禪師播磨... 結制... 修行... 禪師... 修行... 禪師...

愚濁補

俳調補

諷險

任誕補

玉桂折次云むうしくまかしくるままにげぬ男の野に
あひの一日のうらみとて乱るる
あはれ海よもあはれ

由化和尚の和詩

莫怪年以逢知つ 衣束孫弱待天温

起在振舞を訓注 陣程は波神の存

○宗祇新は久波と撰し 桜井永徳の連分不入是より
あはれ

運見夢波法便入 不論上午與下午

あはれ

山鹿甚五を誇りし 軍注者海より國と云ふて是より

あはれ 海より大和止海河内つゝ 菰はきんむらさき

あはれ 甲斐信濃上野下野あはれ海

今日午の経國のついで

傷逝補

貞享二年并壬子のうらみ播磨淡川 楠正虎が墳墓より
自害しし者あり其辞也

重義名持孫元降 至今一塚堆淡川

詠心素及黙然意 梅霜垂深和促理

あはれ

拙者よ遠國の者よ

あはれ

あはれ

跡... 中... 貞享二乙丑年十月二日

貞享二乙丑年十月二日

廣嚴寺和尚

栴成信

排調

○... 二十四支... 朗吟...

言語

○東作云... 借...

豪華

○... 天目集... 明の書物...

補

宇佐美瀧水の古文矩の序... 其所知盡獲其書矣...

先有子... 聖學... 吾黨... 乾... 路... 子... 三...

補

語

Handwritten text in a cursive script, likely a transcription of a classical text. Includes a red seal on the right side.

Handwritten text in a cursive script, likely a transcription of a classical text. Includes a red seal on the right side.

人々... 此... 牛... 小野相承... 之勿... 僧正... 其里... 牛... 曼... 曼... 曼...

中皇自性ノ論法長谷寺史子僧正撰撰書本也

假名世説上卷 終

假名世説下

杏花園蜀山編

文宝堂散木補

任誕

○中島正依仁齋の教授舌耕と云うは四書と講

中島正依の四書... 昔... 借宅...

禮

○小沢... 言...

上にはかきおぼせぬがごとくしるべし水はあなふはき
言理正しきはたけのきよあつたけ

享和元年辛酉七月十日
次

川のまゆみしりてはなはたはなはた
つばきりてあつたけ

文学補

鈴屋組末先生二年風はくま物こくくこく
あつたけよきつりてはなはたはなはた
しりてあつたけ

言語

●水のりもつたけよつたけ山人
用らりてあつたけ自津つりてはなはた

川名名
孟澤林助

長久人

言語

三十年九月十日はなはたはなはた
つたけよつたけよつたけよつたけ
つたけよつたけよつたけよつたけ

○下谷よあつたけ万全山祝まき組末の縁あつたけ

瀧の字あつたけしりてはなはたはなはた
つたけよつたけよつたけよつたけ
つたけよつたけよつたけよつたけ

排調補

或人の云今江戸に元三大師の画像ありしりて
思ひ出せりかの芭蕉り白子

角大作井手の蛙のむげーふ

借勢の中をかー 勢ある喜ありとふらふらあやう耳ふふと
ざらぶづーさ白あふ

方正補

水谷強えい安永天明のはり人多く基をわつてつる門人と一日
局を對て其席あふふふふふふふふふふふふふふふふふ
足の下ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
くせふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
つら排存せー

巧藝

○慈次了介息遊子了平 二弟八八松云筆のすまゝ調子まじり強も筆まじり
くまゝ筆筆まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

巧藝

和やがふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
○又云申いたのふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

棟逸補

たのふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
本阿弥光悦了寂院 了平晩年洛北寄る峰子一寺と建まーく光
悦さー早せーくふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
と監護さる解まの答あふふふふふふふふふふふふふふふふふ
いふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
又いふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
道ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

排調

茶とみゆりすはよきものなりけり
あはれはあはれとて思ふべし
あはれはあはれとて思ふべし
あはれはあはれとて思ふべし

○銅脉先生

畠中於母と称し
聖護院宮に侍す

庚申のくち中風うつて老る

いづれはあはれとて思ふべし

竹南先生道脉揚ル 定是闇魔成敗場

縦衝未嘘欺ヒ青鬼 魂魄於迷極道傍

和韵 銅脉

○墨蹟手麻商賣揚ル 死生素是任相場

生分死分斯面倒ル 学仙長欲尽ル阿傍

羽子くち 享和元年辛酉つらきうせぬ銅脉の若き

平の初詩の太平樂 勢多度巴詩のくち口子吟矣せり

君脩字は君脩通名才翁親海
号は世之太宰子受く 云々まはる物とて思ふべし

人と今歌のくちあはれとて思ふべし

よきとて思ふべし

起るまづ國字のまはるる人なむとて思ふべし

とて思ふべし

いふくせはあはれとて思ふべし

とて思ふべし

あはれとて思ふべし

とて思ふべし

文学補

平の初詩の太平樂 勢多度巴詩のくち口子吟矣せり
君脩字は君脩通名才翁親海
号は世之太宰子受く 云々まはる物とて思ふべし
人と今歌のくちあはれとて思ふべし
よきとて思ふべし
起るまづ國字のまはるる人なむとて思ふべし
とて思ふべし
いふくせはあはれとて思ふべし
とて思ふべし
あはれとて思ふべし
とて思ふべし
あはれとて思ふべし
とて思ふべし

豪華

ておえりておとす申すもあゝあゝは原のかゝら世に
 りよあはれにぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ

品類

極下流名まゝ今も此細をいふは雷を九所いふは
 あゝのよゝく時ゝ怒るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 とあなまゝの西様様大佛をいふは二十人おの同
 名の初はし厚令をいふは神の給る天皇のえと
 大原昔まゝいふは享和の炎上の免れをいふは
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ
 らしむるはもつとぞいとてお君のらまはる水は肌をあ

品類
神

百部謝あまのいふ人てお怒るまゝあゝいふ人は構ひ
 我のよゝくをいふ人てお怒るまゝあゝいふ人は構ひ
 日本通来のもの者皆河骨あり仁前へ中下あり
 東涯も上戸あり圍齋はえまゝいふ人も上戸に御来い

文学

下戸も郭も其書の上方にあつた

○村井椿清字ハ大年 琴山 あり人周公且待且とら

左丘明喪明とことごとく 況んやあつた 馬田昌調

字ハ匠 河津と云ふ あつた

文学

○源氏光業の正色とあつた

とらふあつた

とらふあつた

とらふあつた

つた

品藻 神

子式 本姓ガ野名ハ信譽ノ字ハ
子式字云々ト云ハ本姓ノ人 云 夫情十二部の時京都とあつた
先子式子湯と云 附十二経と云 一 周旋一 大抵古きより

うろく 大才致知格物の護り 護り論ありて経書の中

人の中へと古人と排撃し 甚才よほつた 珠と珠

事ありてもあれ才氣保せは 自負さつた

人の子と云ふ 大才と云ふ

と云ふ 子式と云ふ

と云ふ 子式と云ふ

と云ふ 子式と云ふ

と云ふ 子式と云ふ

と云ふ 子式と云ふ

と云ふ 子式と云ふ

豪爽

○江戸の初編と云ふ 北条の化装 由天文六年

囊補

言ひいづくは未子屋の陽明其時多分中を以て其心
のありしをのけしるるも香川太沖の語也

東屋先生の子天石の母内人教宗権宗子付の時天石
家の沙門一人来り吊り祀りしつゝ人子山に下りて
のり哀哭の時とて常極道の道に語れりしとて
之を以て中諸人系りしとて木村海に遊ん
ゆゑ自に時を磨るも引入る事思はれり
沙門此れとて席とて語る事江家の人
とて平東屋に侍りて後儒とて紀州に官せり
羅山先生名信勝字道春
夕顔巷とて人石川丈二翁のりしとていまり
詔問敬見月 未登文選樓

文學補

文山の事

簡儼

○宇津宮由的三進不ノ号
三進不ノ号
三進不ノ号京師のまけり語多し虱先生とて
多く頭書とて著せり故也

假諺

○川名林助名五傳字仲裕
兩條少之房別の人徂來存のまけりしとて今も

不用とて出りしとて其の盗心とて一
し贈送下行所討ときしとて林助とて
く出りしとて其の盗心とて一

言語補

并取谷風橋の少小角力とてしとて日本橋本町とて
しは河鯉とかんしとて其の價いとてしとて
しとてしとてしとてしとてしとてしとてしとて

茲匠者の多ぶる... 此か... 白湯の... 癖... 庭子
の時... 曰く... 抄の中

仁斎先生存在の時... 大... 通... 著...
方... 誹... 持... 示... 且...
并... 抄... 夫... 一...
か... 人... 辨... 一...
出... 一... 一... 非...
... 一... 我... 彼... 非...
... 一... 困... 一... 一...
... 一... 一... 非... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...

宛... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...

○雪中... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...

俳... 一... 一... 一... 一... 一...

... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...

○振越菜陽の二の拍言の化と考るありてして世に思ひ
成るその名也

柏木衣紋
梅津掃部

葛替月吉原

とくは柏木梅津の對聯和詩の名對りて
明和八 吉原子大災ありて善治しと申す
辛卯 丁卯の初し善治りて
てとあり且善治りてと和詩の初し善治りて
此れ和詩の名對り其名月色人ともありて和言
よき善治りてとありてとありてとありてとありて
よきとありてとありてとありてとありてとありて
月もよきとありてとありてとありてとありてとありて

先哲三卷
三左

方正補

並加之號
取之ヲ神道
井弘道
録云實其本
神皇正統
紀以正直
亦載此言

賢媛補

先哲三卷
名嘉字
方正補

〇〇〇〇講談の時今年とありてとありてとありて
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

文月法間記の上野の御所を氏の子撰りてとありて
実子才とありてとありてとありてとありてとありて
いと申し遊杭樓雲深とありてとありてとありてとありて
虚語ありてとありてとありてとありてとありてとありて

言語

まじ搦麼法徇のやと賞〜〜序よりけり

○其碩云男女のたより〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

雅量補

伊予仁齋先生別子堂徳と号し〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

文学

○諸分店卸一名治毛鉦〜
〜
〜
〜
〜
〜

二字論

小考

大か小かまよい〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

沐浴
補

平野菴法の浮城江戶の庵の京都の徳庵の富
 子の排譜ともく鳴は人竿杖いまう人まうまれ
 ども人の携舟いまう貞徳正流の河を流く浮居流
 流をいまうくいまうく河京の水と飲飲く流をのまとのま
 びまれ橋修らうくいまうくいまうく

巧藝

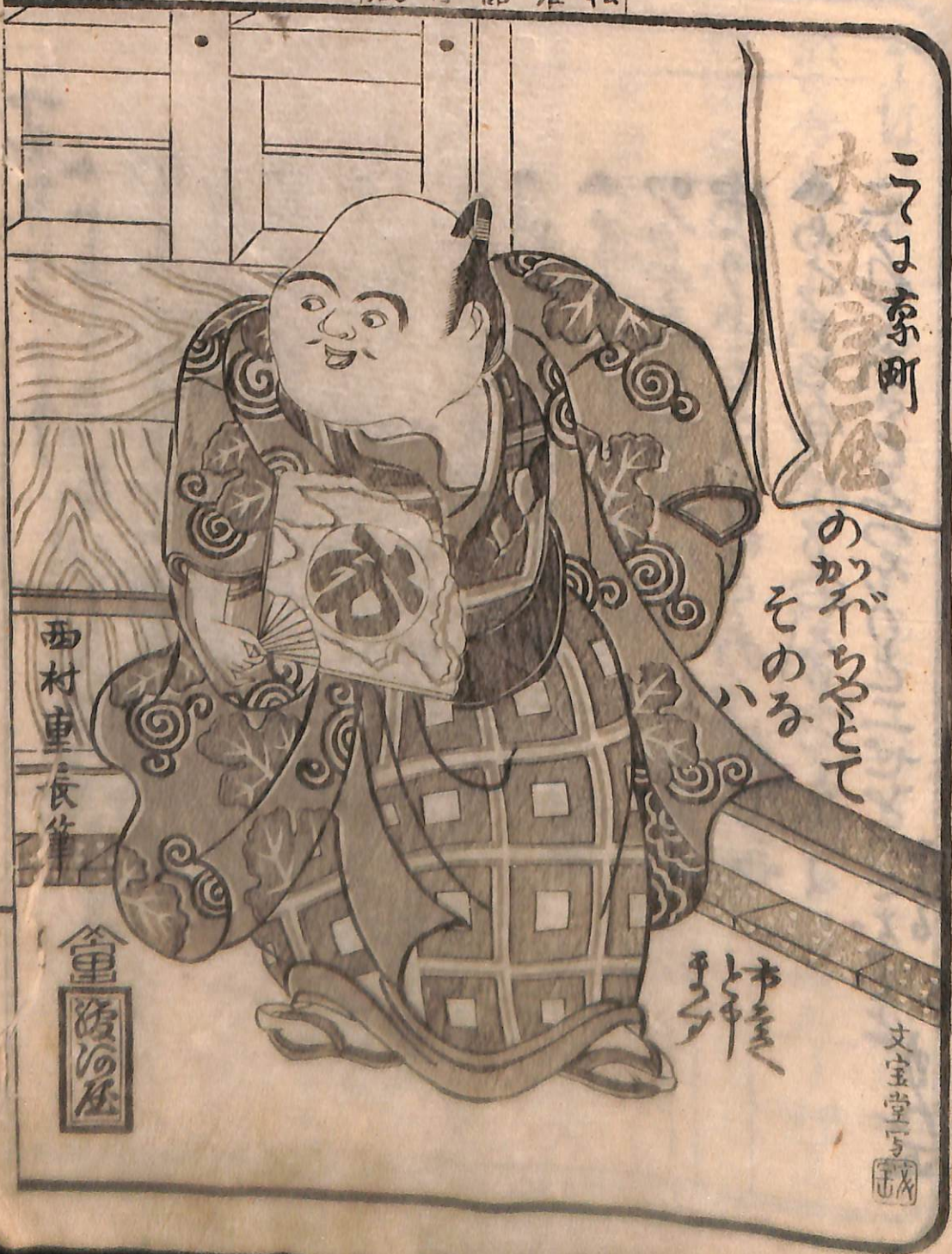
○祖仙森氏 濟陽の人 流をいまうく 權といまうく 画名
 一の雷回と甘祖仙の權と移く湯をいまうく 一種と
 多くいまうく 濟陽のまま日權者の託して一種と
 賞していまうくて庭樹のまままいまうくいまうくいまうく
 あらう後の題と写して子数篇いまうくていまうくいまうく
 写して某船の某氏の筆といふ某氏のいりく惜むく
 此様の人家のまま育の形いまうく山中自在のありまいく
 あらうくいまうくいまうくいまうくいまうくいまうく

雅量
補

ふ二年終る其真圖と
名の實よりしては、大雅堂より、
申らるるも、此の、
せば株牛も、
一冊、
騎、
つ、
を怪我、
束、
落、
又い、

う、
う、
一、
き、
名、
人、
い、
二、
か、
い、
調、

藏所館羅松



つよ京町

のがらるゝとして

そのま

市見
と申
手ノ

文宝堂写

西村重長筆

倉後海屋

輕詠

今太助とらゝあめをたらゝやうくまふもさとし
 へーいゝへ日一族づも此のつとくしゝらゝわさきりゝは
 多きこゝやうて持きんあさむ中等扇の柄其丈せ替歸仕
 直既濟とて或は未濟とてまじらゝらゝとてい老母及び一柱の
 現今せむいゝあざいゝ人々ゝゝとてあせりゝとて大衆がま
 事とていゝふゝゝゝ一早きとていゝ俗無のゝ氣ぬゝ
 〇新東京所大士の衣布を海にせかゝらゝらゝとていゝ
 かゝらゝるカボチヤとらゝる瓜の似ゝらゝるゝゝ人かぢらゝる
 りぢらゝるゝゝとていゝゝゝゝとていゝゝゝゝとていゝ
 〝〝〝〝とていゝゝゝゝとていゝゝゝゝとていゝゝゝゝとていゝ
 〝〝〝〝とていゝ都下とていゝ〝〝〝〝〝〝はまき校録とていゝ模写し

此書子の終り上よあり

▲十二てうちん苑むゝて記のひなて

かざりなまのめを宛てて記のひなて

のりゆまづるのめを宛てて記のひなて

▲かどのはにを宛てて記のひなて

てうちん苑むゝて記のひなて

▲のりゆまづるのめを宛てて記のひなて

二さきに宛てて記のひなて

くしちのる六甲の町

▲まがよあまのめを宛てて記のひなて

かゝるを宛てて記のひなて

中より宛てて記のひなて

▲あまのめを宛てて記のひなて

二たれに宛てて記のひなて

さうばの市を宛てて記のひなて
記の合ありて附持併せとて記のひなて
釋併ぬ加保信すとて記のひなて

雅量

○平次常高云抽す二四のひなて

涼川一り多たの北側へ起て記のひなて

又点丸の情命了平点丸とて記のひなて

あり此菴の記文を裏とて記のひなて

の附ありとて記のひなて

らり天井二枚紙とて記のひなて

千とて記のひなて

暖炉の物とて記のひなて

ついでに鉄線かきとて描の曲をすゝむる事なり
蒼主の話より一記文其あつて一は一冊の
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり

ついでに鉄線かきとて描の曲をすゝむる事なり
蒼主の話より一記文其あつて一は一冊の
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり
一は一冊の日記文に法をいへば毎日の事なり

言語

●京都五条の邊より之をいへば一冊の日記なり

は衣髪より人馬天驕織の袴りよきなり〜
 さくらと遊ばよ入るおき〜 織子終るおはら〜
 部を夜あけのさしき〜 例のさしき〜 絆故とさしき
 飲さ〜 ねば〜
 さいさいのさしき〜 後甘のさしき〜
 さよ〜 ねば〜
 さよ〜 ねば〜
 せとさ〜 ねば〜
 せとさ〜 ねば〜
 せとさ〜 ねば〜
 せとさ〜 ねば〜

八重垣云々
 けりりめあ
 のふまのちんま
 ふよあまのねの
 うまろこ

雑悟

●下野國足利の里の布屋の〜 壯年より〜 禪修をゆゑせり

りは禪修の〜
 かあ〜
 筆〜

言語

二代一子首とま孫さ〜 年暮生花とま〜
 ○さ〜
 谷の艾
 田〜

子回春の昔は... 店子... 伊と... 甲...

文学

〇東江先生 の鱗字の文能 江戸梅子...

あり... 白馬... 義楚六帖...

諸君斜曲背 白馬推車
已及戰場處 逃回同部家

先牛此時とらんく大笑せらむと此は先牛の雷名四方子
集と日くあがりく深筆とさう者つふ市さうま
あく強さあく此手深とさうさありのらうり先

雅量

○宝永五子年十二月感應寺の講ふは菴宮く尚菴
會あり此の(源定幸)存百二十七の年とく上をり刈りて
秀雅百人一首三十一首 出えをりたさむ勇ひ
秀とく男行て強くこのれたのさうま

長生殿裏に秋富 不老門を日月逢二行

此詩とさういふと存れら子掛おらう是上席の者り古
実らうり一けさ存は官のけいさく勤功ありはて辞一

く保後舟く唐子りうり三河義純とくおさあ
此茶と強めらり異時子あはる 四十余年 漸く九十九年
の所留組一都鄙と徘徊さうと十年後 武江土塚子
笑居と天正十年 影河廻子出六け一宝永八年所
年 壽百二十歳とく終りて

秀雅百二十一首書云 是幸を記しあふと節とさうし感状十八
通不持せしと此武勇の人と強けりさうとこのら恒らとれくは意
勤の人とて此強記とあふらこの強けりさうとさうと名白くは意の
細くいさうおとさうさうさうあれとさうの味とさうとさう人等し味と
えくはくさその味とさうとさうし九せは法をさうとさうと
法の家さうとさうし強強強とさうとさうし強強強とさうとさうと
らうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
しむらうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

假名世説下巻 終

べうん 武江の人とさうとさうとさうとさうと

偷トウ吐ト侯コウ押オシ淫イン也ヤ
又スムコイサカ
コヌコトコト
桃トウ之シ博ハク之シ

ソガ一ノ義の人あり今建
可也カク論ロン衡ヘイのノ義ガ人ノあり今建
善ゼン之シ徳トク新シン廟ミウ之シ其キ實ジツ也ヤ
性セイのノ義ガ人ノあり今建
文ブン筆ヒツ之シ其キ實ジツ也ヤ
道ドウ之シ其キ實ジツ也ヤ
義ガ人ノあり今建

前マヘ之シ其キ實ジツ也ヤ

西セイ之シ其キ實ジツ也ヤ
辨ベン士シ則スレバ之シ其キ實ジツ也ヤ
之シ其キ實ジツ也ヤ
者シャ文ブン人ノ辨ベン士シ之シ其キ實ジツ也ヤ
所ショ之シ其キ實ジツ也ヤ
亦オク是シ也ヤ其キ實ジツ也ヤ
我ガ所ショ習シユ先セン生シヤウ之シ其キ實ジツ也ヤ
人物ニヒトモノ之シ其キ實ジツ也ヤ

大鳥オホトリ之シ仙セン人ノ所ショ來キ也ヤ

杏架擁護位子 誰

年何月

右政教一致朝音奉教
自居盧處那大悲之教
命品入、段奇特至
也依之轉瑞移福、
加持力ノ憶印ヲ授
與シテ了自今以後
現世公道ヲ全ラシテ
未來者考ヲ受メ
容現寺ニ世安寧
ヲ祈ル社肝要ナ
ラメ 陽敷山
明治 洋蓮社寺

題

多財瑞星寺の

の

生

了

た

一

情

是

の

探

冊

文

新集

杏花園蜀山先生著述目錄

南畝莠言

此書先生著述之精華也... 先生之著述... 南畝莠言... 先生之著述... 南畝莠言...

千紅萬紫

蜀山先生之著作... 先生之著作... 千紅萬紫... 先生之著作... 千紅萬紫...

同編二編

此編子... 先生之著作... 同編二編... 先生之著作... 同編二編...

杏園詩集

先生之著作... 先生之著作... 杏園詩集... 先生之著作... 杏園詩集...

同續編

先生之著作... 先生之著作... 同續編... 先生之著作... 同續編...

假名世說後編

初編之續... 先生之著作... 假名世說後編... 先生之著作... 假名世說後編...

蜀山餘錄

先生之著作... 先生之著作... 蜀山餘錄... 先生之著作... 蜀山餘錄...

小春紀行

先生之著作... 先生之著作... 小春紀行... 先生之著作... 小春紀行...

一話一言

先生平日之著述... 先生平日之著述... 一話一言... 先生平日之著述... 一話一言...

文政乙酉年孟春發兌

昭三宮田吉哉

東都書肆

麩町四丁目南側

角丸屋甚助

同五丁目大横町

家内... 總... 食... 華... 道... 五... 下... 十... 有...

角丸屋徳三郎

南畝莠言

南畝莠言



